

二〇一二年二月三日

よつこいしよつかまり立ちて冬座敷  
流鏑馬の発止と駈けし落葉道  
枯れ色の混じるも侘びや冬紅葉  
溪流の岩に貼りつく散り紅葉  
湯豆腐の伊賀の土鍋に馴染みたる  
冬木立拍手打てばひびきけり  
黄を重ね重ね落黄とどまらず  
街路樹に華燭ひともる師走かな  
襖絵かはた友禅か楓燃ゆ  
雲の影あれては消ゆる冬の浜  
木の実降る悲鳴をあげしトタン屋根

二〇一二年二月二日

冬の蝶風に吹かれて消えにけり  
初雪へ開く秘仏の扉かな  
魚屋の床は常濡れ十二月  
玉の日に斯く美しき冬紅葉  
流木の岩に逆立つ紅葉谷

二〇一二年二月一日

古戦場いまは棚田に冬ぬくし  
殉難の碑を噛む枯蟪蛄  
照り紅葉地獄谷へと標立つ

二〇一二年一月三〇日

扁額は帝の宸筆冬もみぢ  
道小春認知度テストクリアして  
陽に反りて寒天重さ無くしけり  
春日造り流れ造りや宮小春  
冬晴れの水ほとばしる芋車

なつき

満天

ともえ

せいじ

うつき

満天

とうち

花茗荷

はく子

三刀

ぼんこ

うつき

よし子

よし女

ともえ

なつき

菜々

せいじ

せいじ

菜々

満天

うつき

菜々

ひかり

二〇一二年二月二九日

夕づきて黄葉明りの御堂筋  
山眠る幼き志士の墓もまた  
嫁自慢盛り上がる苑うそ寒し  
好日の野点に紅葉散りやまず  
夕陽をはじきて軒の柿簾  
名将の産湯井ここに冬日燦

二〇一二年二月二八日

キャンパスの黄葉に立てば鳥語降る  
妻の忌を修し安堵の冬支度  
疾駆せしライダー落葉舞ひ上げて  
小春の日あそぶ水際に稚魚戯るる  
縞なすは丘のなぞへの冬菜畑  
生け垣を角刈りにして年用意  
銀杏散るテールランプを追ひかけて  
水路閣疎なる紅葉の朱を点す

二〇一二年二月二七日

垣根越し終句ふ空き家かな  
鈍色の雲裂きひかる冬の雷  
もんぜんの左右は老舗の湯豆腐屋  
湯たんぽのお湯出す口が楽奏づ  
百羅漢の泣くも笑ふも紅葉影  
こうのととりすくと降り立つ冬田かな

はく子

よし女

こすもす

宏虎

三刀

菜々

百合

はく子

よし女

ぼんこ

うつき

せいじ

満天

わかば

きづな

花茗荷

菜々

治男

うつき

ともえ

毎日句会みのる選・二〇一二年二月六日